

監修委員 井上靖 石森延男 更科源藏

編集委員 加藤多一 木原直彦 西田良子 和田義雄

第五卷

北海道児童文学全集





北海道児童文学全集

第五卷

立風書房



北海道児童文学全集 第5巻

21cm



昭和五十八年十月一日初版第一刷発行

著者代表―石森延男

発行者―下野博

発行所―株式会社立風書房 東京都品川区東五反田三十一六一八

電話東京四四七―一一九一 振替東京五―七四四九三

本文―信毎書籍印刷株式会社

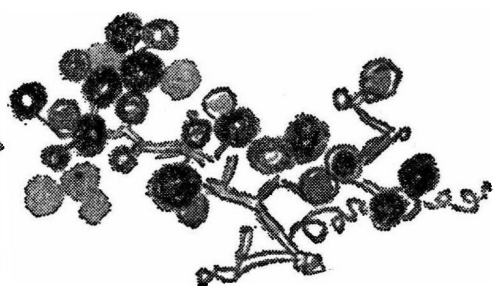
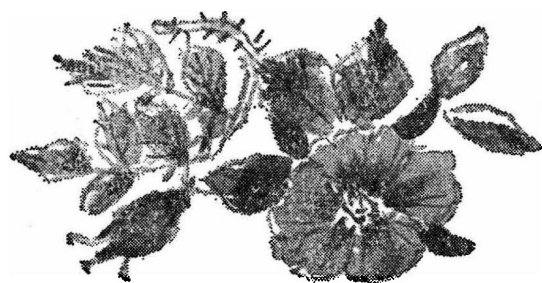
製本所―株式会社難波製本

表紙・箱・絵印刷―株式会社廣濟堂

製版―江戸製版印刷

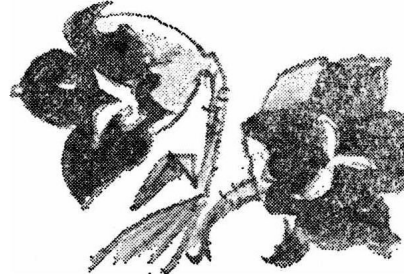
定価一、八〇〇円

8393—50175—8909



北海道児童文学全集
第五卷 目次





親子牛
おやこうし

太陽をかくむ子供たち
たいよう
かこむこども

新しい魔法の町
あた
まほう
まち

解説
かいさつ

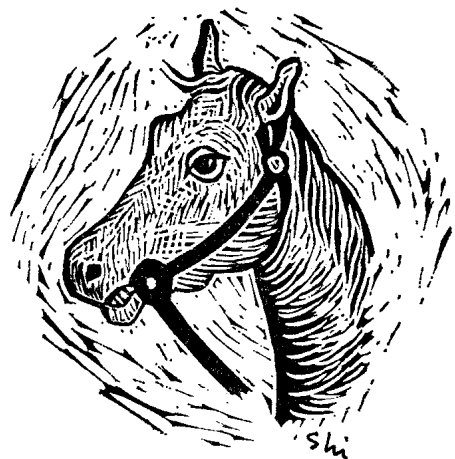
石森延男
いしもり
のぶお
3

川崎大治
かわさき
だいじ
303

川崎大治
かわさき
だいじ
329

和田義雄
わだ
よしお
351





親子牛
おやこうし

石森延男
いしもりのぶお

第1章 ケンとバル

ケンは、ストーブに泥炭でいたんをはうりこむ。七月だというのに、今夜は、指先がつめたいほど。

「もっともやしたらいい。」

かあさんが、台所で洗いあらものをしながら声をかけた。ちゃんちゃんこを着たかあさんの背中せなかが、もつくりしてみえる。へとうさんは、まだ牛小屋からもどってこないのかな。乳牛品評会にゅうぎやうひんぴやうかい、あすだもの、じつとしておれないんだ。ヤナギの勝負しやうぶがきまるんだから。そういうケンだって、おちついておれやしない。さっきからストーブをいじったり、スベリオをちょっとふき鳴らしたり――。

こうして、ケンも、とうさんも、かあさんも、あしたの品評会ひんぴやうかいのために、どうにもならないほど、胸むねをどきどきさせているのである。

ケンは、この月つきが村むらの小学校六年生で、親子三人ぐらし。月が村というのは、北海道イシカリ原野げんやのどまん中にある小さな開拓村かいたくむらである。名高い製紙工場せいしこうじょうのあるエベツ町から、八キロほど南にはいったところで、学校といっても、みんなで二十八人の子どものしかない。

ケンのはじめからここに入学したのではない。入学したのは、日本の小学校ではない。マンシユウ（いまの中国東北部）・ユウガクジョウの小学校なのである。ようやく小学生になってよろこんだが、たった一か年くらして、その土地をおきざりにして、日本にひきあげねばならなくなった。

ケンの父も母も日本人ではあるが、マンシユウ・ホウテンの生まれで、ユウガクジョウの果樹園で働いていた一家である。ユウガクジョウには、農業試験場があつて、家畜の研究もおこなわれていたが、果樹栽培の研究もさかんにおこなわれていた。

ケンの家では、かなり広いリンゴ園をもっていた。

何年間も苦心をして、貯蔵のできるリンゴ新種や、早く実のつく栽培法も発見していた。リンゴの実の肉まであかくなるようなことも、すでに研究済みであつた。

これからは、いよいよ有望な仕事になるというやさき、あせの結晶の果樹園をすてて、ひきあげねばならなかつた。

ひきあげのときは、ちょうどリンゴの花ざかりの季節。リンゴの花は、ボケの花よりも、いくら大きく、白っぽくて、わずかにあかく、木全体が明るく見えるほどむらがつてさく。

小さなリュックサックを背おったかあさんが、両手でリンゴの花のかたまりを、そっと包むようにして、ポロポロと涙を流した。その横顔を、ケンは、どうしてもわすれることはできない。

とうさんは、リンゴ園の南側を細く流れている温泉川を、まばたきもしないでながめていた。

川の岸は、きなことのように黄色な砂地で、手ですこしばかり掘りおこすと、温泉がぶくぶくとわいてくる。

ケンは、この砂掘りがすきであつた。自分のからだが、とつぷりとうまるほどのくぼみぐらいは、すぐ掘りおこすことができる。なみなみとわいてたまるあたかい池にジャボンとつかって、空を見るのが、とてもすきで

あった。

頭のすぐそばの砂原に、よくセキレイがとんできた。ビビッ、ビビッと鳴きながら、川づらをすれすれにとんでいくのもおもしろかった。川の向こう岸にはえているヤナギの並み木が、ばかに背が高く見える。山というもののまったく見あたらないこちらの風景は、地平線をまぢかに感じさせてる。だから日の出も、日の入りも、ほんとに近い。

カササギもたくさんとんできた。黒い羽をひろげ、胸だけを白くして、いきな姿でヤナギ並み木を、行ったり来たりしていた。

どこからかばくちくのひびきが聞こえてきて、のんびりとしたラッパの音もひびいてくる。それは、中国人たちの花よめさんの行列である。

ケンがぼんやりあたたかい池につかって、雲を見たりラッパを聞いたりしていると、とうさんがそばにやってきて、砂をそろそろと足にかける。それから腹にかけた。胸に、肩に——あたたかい、重い砂のふとは、ケンには気持ちがよくて、ねむくなる。

とうさんも、ケンのとなりに穴を掘り、そこにつかりながら、ひとりで砂ふとんをかける。ふたりは、ものものいわないで、そのままねむってしまうのである。

「ケン、出かけるぞ。」

とうさんは、大きな荷を背おって先にたった。

そのとき、バルがとんできた。バルは、シェパード種で、生まれてまだまもない子犬だ。いっしょに寝起きしてきたケンだけに、バルと別れるのは、いちばんつらかった。そこで、うちのリンゴ園で働いていたチンさんの

家に、バルをあずけ、ケンたちが立ち去るまでは、バルをはなさずにおくようにたのんであったのだ。

それが、どうしたものか、いま出かけるというそのときにぬけだしてとんできてしまった。へこれはこまった。へとうさんはそう思った。へケンを、これ以上悲しませたくないからな。へ

バルは、小さいくせに、ばか高くとびあがった。ケンの肩かたまでらくにとびあがった。ぼうしをもぎとろうとでもするように、さかんにとびあがった。へこいつは足がじょうぶだから、いい犬になるぞ。へバルは、まだとんがっていない口を、しっかりむすんで、ちっともほえないで、やたらにとびついていた。ケンは、歩くことも進むこともできない。おしまいにはズボンをくわえて、じりじりとうしろにひっばる。

ケンは、しゃがんで、バルをだきかかえた。すると、あばれていたのが、にわかにおとなしくなる。とうさんが、もどつてきてなにもいわないで、バルの首輪くびわをにぎった。いやがって四本の足を地べたにつっばるバルをひきずって、チンさんの家へつれていった。

バルは、とうさんの手にかみつこうとして、はげしくもがいた。そんなことには、とうさんはへいきだ。ときどき、バルをかるがるとつるしあげる。

バルの声を聞いて、チンさんがあわてて出てきた。そうしてとうさんから、バルをひきとっておさえた。とうさんは、走るようにしてもどつてきて、ケンのうしろから肩かたをぐんとおした。

「さあ、出かけるんだ。」

ケンも、まるでバルみたいにひきずられるかたちであった。

ウワンワン、ワンワン、ワンワンキャン——。

つづけざまにバルがほえたてた。バルを見ようとしてケンが立ちどまり、

「バル、バル、バル。」

と泣き声をたてると、とうさんはケンの手をひいた。

ケンたちの乗りこんだひきあげ船が、中国コロトウのはとばをはなれようとしていた。

どらがグワングワン、ガンガンガンガンガン——と鳴りひびく。へうんと鳴れ、もつと鳴れ。ケンも、ちつとも日本になんか帰りたくなかった。ただひとりでもいい、自分の生まれたユウガクジョウに残っていたかった。バルといっしょにくらしていたかった。どらのひびきは、ケンの悲しみといかりをいっしょにして、ブルブルとあたりをふるわせた。

ひきあげ船は、東シナ海の三角波にゆられどおしだった。乗った人たちは、おおかた船よいのため、寝たつきり、荷物でもならべたように、くさくて、動かなかった。

はじめて海を見るケンには、大きな波がめずらしくてあきなかった。甲板に出て波のしぶきと遊んだりした。じょうぶでないかあさんは、船よいのために、まくらから頭があらがない。

ひきあげ船は、ようやく日本の北九州の海岸に近づいた。山と山がいくえにもかさなって、みんな青々としていた。光っているようにさえ見えた。

へ日本という国は、なんと山の多いところだろう。

マンシュウからきたケンの目には、あまりいいものではなかった。

いっしょにひきあげてきた人たちは、みんな甲板に出て、だまって山を見ていた。中には涙を流している年よりの人もいた。さも安心したような明るい顔を見ている女の人もいた。だれもが、いいあわせたように、口をきかない。

「日本のどこでくらすの？」

ケン、かあさんに、そつとたずねてみた。

「まだ、きまつていないよ。」

船中では、ほとんど食事のとれなかったかあさんは、いかにも青く、ほおがおちて、肩かたもすっかりやせてしまった。くぼんだ目だけが底光そこひかりして、いくらか大きくなって見えた。ケンは、同じことを、とうさんにきいた。

「そうだ、そろそろきめねばな。」

そういつてから、荷物をどしつと背せおつて、船をおりる用意をはじめた。

マンシユウ・ホウテンで生まれ、そこで育ち、ユウガクショウで果樹園かじゆえんを作り、一生をここですごそうと決心をしたケンのとうさんには、親おやしい友だちなど、日本にいるはずがない。また、身よりのものもいなかった。ひきあげをしなければならぬという運命におし流されて、ここまでたどりついたかたちである。あてもなく流されてきた一枚の板いたべらに、しがみついている親子三人——あてのあろうはずはない。

とうさんが、なんとなくしめつぽくて、青くさい潮風しおかぜを呼吸こきゅうしていると、ふと頭にうかんできたことがあった。それは、国木田独歩くぎだどくぽの書いた「空知川の岸辺がしべ」という文章である。これは、中学生時代に読んだ小説しょうせつであるが、みように心にとまっていた作品だ。へ林が暗くなったかと思うと、高い枝えだの上をしぐれがサラサラと降ふって来た。来たかと思うとまもなくやんでしんとして林はしずまりかえった。こんな文句もんくが、とうさんの目にうかんでくる。そこでとうさんは考えた。へそうだ、北海道だ、北海道だ。どこでくらすのも同じこと。どうせくらすなら、ひろびろとしたところがいい。すこしでもマンシユウくさいところがいい。そうだ、北海道だ。へ

とうさんは、右手にかあさんの手を、左手にケンの手をとって、

「北海道へ行こう。」

と、ゆっくりといった。

「北海道?」

あまりとつぜんなので、かあさんはききかえした。とうさんは、うなずいてみせた。

「わたしも、同じ働^{はたら}くのなら、未開^{みかい}地^ちがいいと思^{おも}つていたわ。あそこなら、きつとマンシユウ気分もするにちがいないし、ケンもよろこんでくれるでしょ。」

しかし、ケンの頭は、バルのことで、まだいっぱいになっていた。ユウガクシヨウの温泉^{おんせん}川^{がわ}のことや、リンゴ園のこと、ひろびろとした野^のっぱら、セキレイやカササギ、それにチンさん——へいや、バルだ、バルだ、バルだ——

「汽車に乗^のつて行くんだよ。たくさん乗^のるんだよ。」

かあさんは、そういつて、ケンをよろこばせようとした。汽車は、すぎであつた。ケンは「たくさん乗^のる」というそのことばに、いくら心がひかれたぐらいである。

「どうだい、北海道に行くかい。汽車に乗^のつて?」

かあさんは、ケンの顔をのぞいた。つかれた目がいたいたしい。

「ぼく、行く。」

「行^いつてくれるかい。」

かあさんは、ケンの両肩^{りょうかた}をだいた。

それからケンたちは、ひきあげをせわしてくれるところに行^いつた。ここですばらくのあいだ、調^{てい}べられたり、相談^{さうだん}をしたりした。北海道行^いきがきまり、いよいよ出^で発^{はつ}することになった。

いざ汽車に乗^のつてみると、いかにも、小さくてきたならしい。マンシユウのあの大きな、美しい流線^{りゅうせん}型^{けい}緑^{りく}色の特急^{とくきゅう}アジア号^{ごう}にくらべて、なんとみすばらしいのだろう。

へこれなら、めずらしくも、おもしろくもないや。〴〵

ちっぽけなおもちゃの汽車は、ピーピーとかん高い汽笛を鳴らして、さかんにトンネルをくぐった。とうさんは、さけぶような声をだして、

「トンネルだよ。」

へおもしろいだろう。〴〵といわんばかりだ。

目まぐるしくトンネルをくぐったり、出たりすることが、ケンにはかえってうるさかった。カラーンカラーンとのんびりとかねを鳴らして走るあのマンシユウの汽車——二日間もぶっとおし走っていても、トンネルひとつない、広い広いマンシユウの雄大さ、こんなことをなつかしんでいるケンは、トンネルで、たえずまばたきをさせられて、うんざりしてしまった。

北海道に行くためには、いやおうなしに、津軽海峡をわたらなければならない。それからまた汽車に乗ることになり、ようやくサツポロという町にきた。

さいわい、ここで、イシカリ酪農開拓団の加入者をつのっていることを知る。この開拓団は、西田久一という人が責任者になっていたが、この人は、はたしてどんな力をもっているのか、また、その開拓団は、どんな経営組織になっているのか、くわしくはわからなかった。けれどもとうさんには、「イシカリ」という場所が気に入った。それに酪農という仕事もすきになれそうである。へここなら、きつといいぞ。〴〵

「かあさん、ここで働いてみないか、どうだ？」

こうたずねてみた。

「いままでの仕事と似ているから、やれると思うわ。やりましょう。」

これに、とうさんは、力をえた。

サツプロで数日、とまることにする。そのあいだに、入団の手つづきをすっかりすませてしまった。西田というその責任者にもあつてみた。

「マンシユウから、ひきあげてきたばかりなんですが——」

「かまいません。いつしよにやりましょう。」

「なにも、持っていない。お金も、道具も——」

「心配いりません。助けあつていくだけです。」

「親子三人でなんとかやります、いつしよけんめい——」

「わたしは、ひきあげてきた人をすこしでも助けたいと思って、この開拓団を計画したんです。わたしも、酪農には、なんの知識も経験ありません。けれども、祖父と父の仕事を見てきています。」

「おじいさんやとうさんが、酪農をやっていたんですか。」

「開拓農家でした。土地がかなりあつたので、こんど開拓団のために、力をかしてもらうことができました。」

「未開地ですか？」

「こんどのはそうです。しかも、いい土地ではありません。しかし改良していきましょう。はじめからいい土地なんか、もうどこにもありません。わたしの一生の仕事として、これをやるつもりです。不安をもたずに入団しませんか。」

西田さんのことばは、はつきりしていた。話をするその声がばかに大きくて、ちょっとびっくりするほどである。

その日から、きょうまで、何年となく休みなしに働きつづけてきたケン一家である。親子三人、よくも死なずにここまでできたものだ、思えばふしぎなくらいである。

第2章 泥炭地^{でいたんち}

酪農開拓団^{ちようのうかいたくだん}にはいつて働くものには、一戸あたり十町歩^{ちようふ}（約一〇ヘクタール）の土地を貸してくれることになっている。それに乳牛一頭^{にゅうぎゆう}、わけてもらえる。その代価^{だいか}は、毎年かえしていけばいいのだ。かえしなから働いていく、それが、開拓団^{かいたくだん}のきまりになっていた。

もし十年間に、この土地を半分以上耕^{いじょう}すことができたなら、それからのちは、残りの土地全部がただで、その人のもことになるというきまりもある。しかしそれがもしはたされなければ、せっかくのこうした資格もとり消されてしまうことになっていた。これは、開拓団発展^{かいたくだんはつてん}のためには、ここで働く者^{はたら}どうしが、おたがいが考えておかなければならぬことである。

こうなれば、なんとしてでも、土とつくむよりほかに道はない。自分たちの労力^{ろうりよく}と自然^{しぜん}のめぐみとがえられないかぎり、生命もつないではいけない。そうしたぎりぎりのところで、ケン一家は、きょうのこの日まで生きてきた。

ケンのとうさんは、いったん決心をしたからには、ぐちつばいことをひとこともいわなかった。へこんなに広い土地をわけてもらったんだ。やろうな、十年後をたのしみにして。

まず、バラックをたてることからはじめた。もちろん西田さんのせいで、借金^{しやっ金}をしてたてる。十坪^{じゅうへい}（約三三平

方メートルの家、それまたひとつ間の平家。それをしきって、台所と居間、それに寝室。これは人間たちの住む場所だが、もうひとつしきって、乳牛のいるところにした。

へやとへやのしきりは、壁でもなく、ベニヤ板でもない。ナンキンぶくろをひらいて、その布きれをつなぎあわせたものをつりあげた。

「なかなかしゃれた色のカーテンじゃないか。」

とうさんは、手でさすりながらこんなことをいった。

夜具などのもちあわせもなかったが、ベッドもこしらえた。床の上にはし草をぶあつにしいて、それをナンキンぶくろの布で、うまくくるんだ。いいわらぶとんになった。その上に寝ると、がさが音がして、ほし草のおいがして、野原で寝ているような気持ちができる。へんだかマンシュウの原っぱで、寝ころんでいるようだな。ケン、このベッドが大すきになって、ひまがあると、寝ころんでたのしんだ。

食事のテーブルも作った。リンゴ箱を二つかさねるとちょうどいい高さになる。親子三人の食器をならべるのに、これもちょうどいい広さになった。こしかけも、リンゴ箱だ。テーブルにも、こしかけにも、おとくいの装飾デザインを——つまりナンキン布ばり。

「ナンキン布、オンパレードだわね。」

かあさんは、家の中を見まわして笑った。

「いっそのこと、わたしたちも、ナンキン布地の服を作ろうかしら。」

ニワトリを十羽、飼うことにした。とり小屋までは手がまだとどかない。それでニワトリたちは、自由の天地——野ばなしということにした。外で寝ようが、家の土間にはいろいろが、ニワトリのきままにまかせることにした。